

# 明治神宮所蔵「加藤玄智博士生祠研究資料」

——紹介と若干の考察——

佐藤 一 伯

はじめに

## (一) 加藤玄智博士の略歴

明治聖徳記念学会創設者の加藤玄智(一八七三—一九六五)は、明治六年六月十七日、東京浅草に生れた(浄土真宗高田派称念寺僧・加藤玄聰の長男)。第一高等学校(同期に波多野精一、辻善之助、新村出、浅野和二郎など)を経て、二十九年、東京帝国大学文科哲学科入学、井上哲次郎に師事(三十二年卒、姉崎正治は三年先輩)。三十九年、陸軍士官学校英語学教授嘱託(翌年教授)および東京帝国大学文科大文学講師嘱託(宗教学、大正九年まで)。四十二年七月東京帝国大学大学院修了、文学博士(学位論文『知識と信仰』)。大

正元年、明治聖徳記念学会設立(理事・研究所長)。九年、東京帝国大学文学部神道講座講師(翌年助教授)。十三年、國學院大學講師嘱託(昭和六年教授、宗教学)。昭和八年、東大・陸軍士官学校を退官(以後、駒沢大学・立正大学・神宮皇学館・陸軍経理学校等で神道・比較思想を講義)。二十年、東京小石川の自宅(明治聖徳記念学会研究所兼)焼失。戦後、静岡・御殿場市住居、藤玄公と称し月例講話を開催。三十五年十一月、紫綬褒章(神道の宗教学研究により宗教文化の究明に尽力)。四十年四月、勲三等瑞宝章。五月八日逝去(教え九十三歳)。葬儀は御殿場市の大雲院(曹洞宗)。墓所は東京・多磨霊園。著書は『宗教学』(明治四十五年)、『東西思想比較研究』(大正十三年)、『A Study of Shinto, the Religion of the Japanese nation (昭和元年)』、『校訂古訓古

語拾遺』(昭和四年)、『本邦生祠の研究——生祠の史実と其心理分析』(昭和六年)、『神道の宗教發達史的研究』(昭和十年)、『神道書籍目録』(昭和十三年)、『知性と宗教——聖雄信仰の成立』(昭和三十一年)、『神道信仰要素序論』(昭和三十七年)など多数にのぼる。

## (二) 先行研究と問題の所在

近年における加藤玄智の研究は、戦前期の国体論や国家神道(国家的神道・国体神道)論に関心が集中してきた。例えば新田均氏の研究では、

加藤は、神社を非宗教とする当時の政府の政策を批判し、神道は宗教であるとの立場に立って自己の神道論を展開した。そのキーワードが「国家的神道“State Shinto”」である。そして、この「国家的神道“State Shinto”」には、神社神道以外の要素が含まれていた。いやむしろ、そちらの方が本質であると考えられている。この“State Shinto”をホルトムが自己の神道論に取り込み、それに影響を受けたバンスが「神道指令」に“State Shinto”を用い、それが和訳されたのが「国家神道」なのである。<sup>(1)</sup>

と、「国家神道」の語の創出に深く関与したことに注目している。神道研究の歴史を扱った安蘇谷正彦氏は加藤玄智

の大著『神道の宗教發達史的研究』をとりあげ、

以上のような神道の定義(1)進歩發達した宗教、(2)神人同格教、(3)多神教、(4)正直至誠の原理、(5)国民的宗教、(6)神皇教)はおおむね了解されるが、(6)の神皇教は現代人には奇異な印象を与えるかも知れない。しかし戦前においては天皇を現人神と言ひ、国家のために尽瘁された人間を神に祀る例が少なくなかったことを考えると特別な主張とは思われない。<sup>(2)</sup>

と、ここでも戦前期の研究者として評価したといえよう。かくいう筆者も加藤玄智の神道・日本研究における明治天皇論を考察した際に、

加藤の研究はチェンバレンら外国人日本学者の刺激を受けており、新渡戸稲造や村岡典嗣らに共通する、日本人による日本論・日本学の構築に向けての、強い使命感を宿していた。とりわけ加藤の研究は、近代における日本人の明治天皇景仰の念を、同時代の研究者が宗教学的方法によって学術的に捉えた、稀少な業績であったといえるのではないだろうか。彼の国体論・神道論は、近世以降の通俗道徳を尊ぶ民衆意識と明治天皇を尊敬する意識、さらには明治神宮創建運動への連続性の問題を、文明教(倫理的智的宗教)としての「生祠信仰」や「神皇信仰」の視点で捉えたことが評価さ

れなければならぬであらう。<sup>(3)</sup>

と指摘しており、もっぱら戦前期の神道研究の範囲でのみ捉えてきたのである。

しかしながら、加藤玄智は戦後も昭和四十年逝去まで、真摯に神道研究を継続した。その二十年の学問的営みについては、これまで必ずしも十分に考察することがなかったように思われる。この点については、島蘭進・前川理子・高橋原の諸氏が次のように問題提起をしている。

国家的神道論者としての加藤に対する関心が先立つとき、忘れがちなのは彼の戦後についてではないだろうか。公職追放の理由のひとつは乃木將軍に関する著作であつたにも関わらず、加藤は戦後にもさらに関連の著述を重ねている。……少なくとも乃木信仰において、敗戦をきっかけに加藤に大きな転向はなかったことが知られる。……『本邦生祠の研究』の「応用」は戦後の人心にこそ必要なのであるという考えを彼はもっていた。知と信と行の一致はつねに心中にあり、口先ばかりの「野狐禪」であつてはいけないという言葉も残している。もちろん「学勞窟」と名づけた自宅での研究も継続し、その成果の一部は「日本に於ける日神信仰の展開様相」(昭和三二年)、「神社信仰の宗教論序説——宗教分類の再吟味」(昭和三年)によって

知れる。<sup>(4)</sup>

そこで本稿では、明治神宮所蔵「加藤玄智博士生祠研究資料」の目録紹介と若干の考察を行うとともに、加藤玄智の戦後、とくに生祠研究に注目したいと思う。

むろん近年、加藤の生祠研究にも関心が向けられてはいらぬ。たとえば中村生雄氏は、

加藤の生祠研究はその国体論的・進化主義的性格のゆえに民間の祀りと国家の祀りの意義を極小化する志向にみたされていたが、そのような近代国民国家を補完するための民間信仰研究の歴史を点検し、その批判的で生産的な継承をはかるうえでも、彼が在地の祀りにそそいだ個性的な直覚と、時代を先駆けて実践したフィールド重視の研究からは学ぶものが決して少なくないのである。<sup>(5)</sup>

と、加藤のフィールドワークと「国体的・進歩主義的」アプローチを生産的・批判的に継承することを説いている。宮本誉士氏の場合は、

加藤玄智の生祠研究は、海外への発信と、国民道德的神道概念打破のために、加藤の宗教学理論の前提である神人同格教概念を証明するための試みであった。その理論の是非は、……神道における人神祭祀について再考することによって検証されるべきであらう。<sup>(6)</sup>

と述べて、生祠研究が社会問題を念頭に置いた理論構築の手段であり、理論の是非の検証を要すると注意している。両者の着目は方法・理論とそれぞれ相違するが、いずれも従来の傾向を踏襲して加藤を近代の研究者の範疇にとどめて論じているといえよう。

加藤は晩年まで学問に勤しみ、近代から現代を生きた神道研究者であり、長年の営為を通じて後代に何を伝えたかったのか、という視点からの考察が求められると思われる。

本稿ではこの問題に着手するにあたり、加藤玄智博士記念学会の機関誌『神道研究紀要』創刊号（昭和五十一年）に寄せられた小林健三「加藤玄智博士の学績」に学びたいと思う。とりわけ、「博士晩年の念願は、名著『本邦生祠の研究』の続篇の完結であり、それとともにこれを根拠として形式化・マンネリ化した神社神道界に新風と活気とをもたらせることにあつたと推測される。」との指摘は貴重である。同論考に紹介された小林氏宛の書簡（昭和三十八年五月十一日）には次のように生祠研究への思いが綴られている。

私は東大在勤中より神道の人即神教的性質を明らかにすることに努めるは勿論、神社神道の実際に適用して、道徳と結びつけて、現代人心の引締に役立つよう

向けて行きたく、諸彦も御同感と存じます。依つて取敢えず、諸彦にこの方面の御留意を特に願っておきたいのです。今後とも、私が始めた生祠研究の理論と実際が、諸彦の御尽力により、進めて頂ければ幸いです。

私が曾て公けにした『本邦生祠の研究』は、生祠の理論づけをやっただけなので、まだその応用は不十分、世間一般は勿論、神道研究家の間にも留意する人少ないようだが、諸彦の麗筆によって、機に処し変に応じて、この目的を達し得るようご尽力願います。例之、拙著中に引用した、小島蕉園大人の生祠、西忠義大人の生祠の如きは、目下人心の引締のために、紙・誌等にて公けにすれば、大いに役立つことと存じます。乞御一読。

右諸彦に特に、御依頼申し、次第に同志も出来れば結構と存じます。右茫漠たるお願いだが、死期の近く私より、こちらで一寸、お願い申しておく次第です。よろしく。<sup>(8)</sup>

この書簡で加藤は、かねて神道研究とその神社神道さらには現代道徳への適用という、理論と実践双方に努めてきたことを率直に語るとともに、生祠研究の応用の重要性を説き、ことに「小島蕉園大人の生祠、西忠義大人の生祠」の解明が大いに役立つと自負している。こうした晩年の加

藤の真意が本稿において問われるところであろう。

## 一、晩年の加藤玄智博士管見

### ——信仰論・実践論への傾倒と学説の再検討

加藤玄智は戦後、御殿場市の自邸に学旁窟研究所を構え、折々に『神道宗教』『神道学』『瑞垣』などの雑誌や社報に寄稿したほか、とくに『聖徳』『富士文庫報』の二誌に論考や随想を寄せていた。それらを繙読すると、戦前における発達史的研究の姿勢を持続しつつも、より信仰的実践的立場へと傾倒していったように思われる。例えば伊勢の神宮、明治神宮、出雲大社についての「二宮一社」私観〔昭和三十六年〕において、

以上、二宮一社に関する現代人としての私、また文化史的または宗教学的の神道研究者たる私の観点から、二宮一社のごとき神社の実践的大原動力は何であるか、といへば、既述の通り、それは「まこと」もしくは至誠そのものである、といへる。

既にそれは文明教期の宗教的産物であるから、至誠であり、またそれは人即神教の原理からくるものだから人道即神道、神道即人道ともいへるし、またその実践躬行は、世界に平和をもたらし大原動力だともいへる。<sup>9)</sup>

と述べているように、「研究者たる私」だけでなく「現代人としての私」の思想が加わっている。「私の乃木神社信仰」(昭和三十六年)では、

私は幼少の折から次第次第に育成された仏教と云う宗教の頭脳信仰から入つて、直ちに乃木神社の祭神たる乃木聖雄に神を拜するに至つたのである。信仰の原理から云えば神即仏即神ということから眺めて来て私は乃木神社の信者崇敬者たらざるを得ないので、必然的に茲に至つたのである。

故に世間の薄ッペラな批評家等が私を以て、仏を信じ神を信ずる等と称して、神仏二足のわらぢをはいて居る宗教学者等訳の分からぬ者であると評するのは的外れの議論であつて其知識は浅薄で其信仰体験はゼロであるという人間の妄評に外ならないと云う事を告白せざる訳にはいかない。<sup>10)</sup>

と語り、「知識と信仰」の調和という生涯のテーマがより鮮明になつたといえよう。

こうした中で生祠研究についても進展がみられる。「日本精神の理解には先づ生祠を」(昭和三十七年)において、是実に西洋人は日本人の精神を解せず、日本人又欧米人の心根を能く分析して其真相を掴む事が出来ず、唯お互いに双方の表面に現われたる見聞ばかりに拘泥し

て、其内心奥底を理解し得ないものに一道の光明を与えて、其各自真相の理解を助ける有力なるものの一つが、茲に述べた生祠であるという事を私は力説して内外の人々に正解して頂きたいという希望に燃えざるを得ない<sup>(11)</sup>。

と、日本と欧米の「各自真相の理解」に資することを改めて強調した。その信仰をめぐっては、

人間にはどんな人間にでも知情意の三が働いて、信仰又は宗教が生れ出すのである。故にどの宗教でも知識の要素を抜にして出来るものではない。唯宗教信仰の上下は其程度々々に於て夫々相当の知信関係が一致調和して成り立つものだと言うことが私の心理分析の結果だ。

と知信関係の調和の上に成立するとして、同時代における記念碑という生祠信仰の変容の事例が及んでいる。

此偉大なる人物は上毛の人岡部栄信氏と呼び、其平素の篤行からして、社会環境に崇高な感化を与えたことは生祠の西忠義翁と差異のない事が分る。斯なると頌徳碑と生祠との差異がなくなってしまう。西翁の場合の様に本人には知らせずして生祠建立を計った場合と、岡部大人の場合のように其郷里に其人がまだ存命中であるために、本人からは生祠を建てられることを

拒んで、漸く記念碑の形で頌徳碑として存在する事になったのである。又時代相から見ても西翁の生祠建立は昭和六年であるのに対して、岡部大人の頌徳碑は昭和三十七年に新建された。此点で生祠が頌徳碑に化けてしまったのだと私は思う。斯様に考えて来ると生祠と頌徳碑の同点と異点とが読者にも能く分ることと信ずる<sup>(12)</sup>。

最晩年の「生祠研究より見たる神仏二教と基督教(承前)」(昭和三十九年)においては、

そこで今回私は長い伝統を打破ってイエス中心の基督教を他の古代イスラエル教の長い伝統たる唯一神教の系統を捨てて二元教的色彩の出で来た唯一神教とも云わなければなるまいと考えて来た。……従来東西の諸学者は伝統の雲霧にかくされて此心眼が開かれていなかったのはいかど疑うに至った。既に述べたように私も種々比較宗教学上の書物を発刊したが、長く其昔風の考えに止まっていた。然しそこに学者の所謂誤りが私にも冒されて居ったのではなからうかと反省して来た<sup>(13)</sup>。

と提起し、ティールレの学説を敷衍してきた加藤の比較宗教学の根幹にあった「人即神教」「人不即神教」分類の問い直しへと向かうのであった。

病床にあつて学問を続ける姿に、加藤を慕う人々は感銘を抱いた。

### 題神道

神道は唯一の道 誤つて聞く偏耳の禽

凡知は無力大なり 鳥は告ぐ妙溪の深きを

(中略)この日博士の枕辺に侍べり「題神道」の詩をいただいた。私共二人(酒井堯・石川軍治か)は先生の一言一言に応答しつつその読みと精神を一語も洩らさじと承った。九十才をこえて病床にあり乍ら口述される先生の姿に神々しいものを感じた。この詩は加藤先生が今まで神道について研究したことすべてを表現したものであると申されていた。言うなればこれはまさに遺言にも等しいものである。先生は昨夏(昭和三十八年)以来胃腸を害し病床にあり、昨年末頃は衰弱されていましたが、よくその精神力により恢復されて今日に至りました。病床口述すでに一ヶ年、精進常樂の心境でこそ出来る尊い姿であります。<sup>(14)</sup>

鎌田純一氏が御殿場を訪ねた際の「加藤玄智博士の想い出」(昭和六十年)は、長年にわたり知識と信仰の調和を求めた加藤の峻厳な生き様を記録していると思われる。

私はすぐノートしつつ拝聴したが、それは一つにはティーレの宗教学批判より発して、先生御自身の学問

目標よりその研究方法、その研究回顧よりして、現代における神道学の研究課題、ことに本邦生祠の問題にふれられて、その研究を継続してほしいのことを懇切に話され、いま一つには古語拾遺に関連して、この研究も是非継続してほしいといわれるとともに、その景行天皇の条に日本武命が東征されるにあたり倭姫命が日本武命に「慎莫怠」と仰せられたとある。この「慎莫怠」、この句こそ、現代の日本人よくよく承るべき句である。よつて、伊勢へ帰り神宮別宮倭姫宮で、この句を記した掛軸でもよい、色紙でもよい、ともかく授与品として頒布し、国民がよくその意を体し得るよう神宮当局に話してほしいと話された。先生のお声、最後までしつかりとさせられていたが、途中御自身感じ入られ、御眼から涙がすすと糸をひき、中断されることもあり、先生が何を訴えようとされているか痛い程解らせて頂いた。<sup>(15)</sup>

## 二、明治神宮所蔵「加藤玄智博士生祠研究資料」

### (一) 資料の概要

本稿で紹介する明治神宮所蔵「加藤玄智博士生祠研究資料」は、大正末から昭和三十五年頃までの自筆メモ、論文

抜刷、書簡、新聞切抜、などの書類四十八件（約七十点）であり、加藤が生祠研究の成果を纏めた『本邦生祠の研究』（明治聖徳記念学会、昭和六年）の刊行後に収集した資料が中心となっている。故宮沢末男氏（早大卒、東京女子学院教諭、訳書に『聖雄信仰の例照せる神道の本質』）の旧蔵資料であり、宮沢氏は資料目次を記したノートの冒頭に「文学博士加藤玄智先生生祠の研究資料について」（昭和四十五年八月十九日）と題して、次のように述べている。

加藤玄智先生は前から生祠の研究を重ねて居られ、既に立派な著書も有ることでありますが、数年前、先生の晩年に私は、その未発の資料の一部をお預かりしました。ここにあるのがそれです。私には、それを発刊する力がありませんのでせめてその内容の目次だけを添えて、何処かの図書館に寄附して、後の生祠研究の方々の御参考に資したいとの願いです。以下は、御預かりした資料の順序に従いました。<sup>16)</sup>

宮沢氏はさらにその目録の「後記」（昭和四十五年八月二十四日）に、

世の中には死後その徳をしたわれて神として崇敬される人々も多いが、中には既に生前に於いて生祠として祀られる方々もある。人間は人の性と神の性とを兼ね備えている。神の性を發揮して余の爲めに尽す人は

世の人からしたわれて神に祭られるのである。私は人が益々神性を發揮して神に祭られる人の一人も多からんことを願うのである。有徳の人が多くなればなる程天下は大平になるのである。その意味で生祠の益々盛んになることを願う者である。<sup>17)</sup>

と記している。

## （二）資料の特色

この資料の特色をいくつか指摘すると、まず、約九十事例を紹介した『本邦生祠の研究』（昭和六年）に未収録の事例・情報が十四例含まれている。このうち加藤が生前に公表したのは、No. 1「明治川神社の末社伊佐雄神社の生祠と其特色」（昭和十四年）、No. 23「太吾上人高井善證の生祠」（昭和十二年）、No. 28「文明教期に於ける神道生祠の一事例（「猪狩神社）」（昭和三十四年）、No. 42「本多忠壽公の生祠」（昭和八年）、No. 47「明治天皇御生祠——信州北佐久郡小沼村高山家後邸内奉安」（昭和十八年）、などにとどまる。また、「加藤玄智年譜」（『東京帝国大学神道研究室旧蔵書目録および解説』所収、平成八年）に未掲載の著作が四件（No. 26「坂翁の伊勢大神宮参詣記に関する二三の質疑」、No. 28「文明教期に於ける神道生祠の一事例」、No. 29「明治神宮と天皇の御生祠」、No. 36「秋田県下の生祠の数々（一）」）確認できる。そしてこれ

| No. | 資料情報  | （年次） | 生祠情報                  |
|-----|---|------|-----------------------|
| 1   | ①加藤玄智「明治川神社の末社伊佐雄神社の生祠と其特色」（『明治聖徳記念学会紀要』五一卷（昭和十四年）抜刷）。  | 昭和14 | 明治川神社、伊豫田与八郎、愛知、明治14。 |
| 2   | ①加藤博士宛福島県平第一尋常高等小学校長篠山廉書簡（昭和十年二月二十五日、生祠に関する質問）回答書類、②田原口瑛蔵『荒至重先生小伝』（同書刊行会、昭和五年）。   | 昭和12 | 南右田神社、荒至重、福島、慶応3。     |
| 3   | ①『神授大白附録 感荷集』第一輯（昭和八年）。   | 昭和8  | （No.4参照）              |
| 4   | ①齋木正之「神授大白」（榊廬舎、昭和八年）、②「生祠に関する質問」回答書類、③「生祠木像之図・生祠塚之図」絵葉書。   | 昭和8  | 市木神社境内社、齋木正隆、島根、昭和8。  |
| 5   | ①井口巳之吉寄贈「本年（昭和十四年）十月三十日明治天皇祭御写真」三枚（十二月十六日付封筒入。姫路市井口邸での明治聖徳記念学会地方講演の様子）。   | 昭和14 | 井口邸内、明治天皇、兵庫、明治37。    |
| 6   | ①『中外日報』第一二五六四号（昭和十六年七月十日、長井真琴「中井玄道氏の『神道者、仏者の論戦』といふを読みて（承前）」収録）。   | 昭和16 | 長井真琴長男妻の父の先々代。        |
| 7   | ①「和田翁生祀之碑」拓本（加藤玄智宛中山久四郎封筒に保管）。  | 不詳   | 和田翁生祠之碑、奈良、慶応3。       |
| 8   | ①加藤玄智宛羽越線温海駅前清野鉄臣書簡（昭和十四年）十一月十四日、酒井神社の社名謄録・村社列格許可申請の件）。   | 昭和14 | 酒井神社、酒井忠器、山形、嘉永6。     |
| 9   | ①「明治廿五年改築高山家奉祀明治天皇御生祠（石造）」写真（昭和十六年十一月八日撮影、長野県北佐久郡小沼村馬瀬口）、②「高山家奉祀明治天皇御生祠石文拓本」、③「明治天皇の高山家の御生祠研究」書類（白羊撰野紙、万年筆書）、④「御大典記念明治天皇行在所絵はがき」封筒のみ。 | 昭和16 | 高山家後庭内、明治天皇、長野、明治11   |
| 10  | ①加藤玄智宛岡百世葉書（昭和十五年十一月十二日、清初三大家の一人趙翼の生祠に（ついで））。   | 昭和15 |                       |

|    |   |                    |  |
|----|---|--------------------|--|
| 21 | ①『芸備日日新聞』昭和九年八月二日（二面に「偲び奉る五十年前 御駐輦の御蹟 いたも盛大に挙行された草津小泉邸の記念式」記事掲載）。   | 昭和9                | (No.11参照)  |
| 20 | ①「梅里先生之碑（和訳） 西山公」（謄写版）一枚。   | 不詳                 | 梅里先生之墓、徳川光圀、水戸、元禄3。  |
| 19 | ①「松平楽翁公の生祠に就いて」メモ紙（昭八年六月十四日）、②加藤玄智宛濱島家賀状（昭和十三年一月一日）、③「福島県石城郡泉村生祠泉神社宝前心学参前社早野社主一行撮影」写真（昭和九年十月か）、④「加藤玄智宛植木直一 郎葉書（昭和七年か）六月七日）、⑤「支那生祠の研究、七月十一日西湖にて」メモ絵葉書、⑥洋書メモ紙。（封筒入） | 2<br>13、不詳<br>8、9、 | ①白河城内鎮国神社・江戸築地浴恩園感応殿、松平楽翁、寛政9頃・文化9頃。②濱島邸内乃木神社、乃木希典、愛知、大正元。③泉神社（No.42参照）。 |
| 18 | ①加藤玄智英文草稿（？）三枚。   | 不詳                 |  |
| 17 | ①加藤玄智宛天満宮教学部主事藤里好古書簡（昭和十一年十一月三日、京都府園部天満宮の生祠否定意見）。   | 昭和11               |  |
| 16 | ①宮崎仲蔵履歴書（安政三年生、現住所兵庫県加東郡大部村、昭和二年地方自治ノ発展ニ功アリトシテ金杯及選奨状ヲ送ラル）。  | 不詳                 |  |
| 15 | ①吉田貫一稿「弔詞」（昭和九年五月六日）、②加藤博士宛吉田貫一書簡（昭和九年五月十二日）。   | 昭和9                | 西霊社、西忠義、北海道、昭和6。   |
| 14 | ①加藤博士宛小泉采兵衛書簡（昭和九年 八月十日）。   | 昭和9                | (No.11参照)  |
| 13 | ①加藤玄智宛藤村徳之助書簡（昭和十四年十二月十三日）。   | 昭和14               | (No.36参照)  |
| 12 | ①加藤玄智宛小泉采兵衛書簡（昭和十一年）七月十三日）、②同封「明治天皇昭憲皇太后草津御小休所趾」解説印刷物（史蹟名勝天然紀念物保存協会広島支部、昭和九年七月）。  | 昭和11               | (No.11参照)  |
| 11 | ①「明治天皇昭憲皇太后草津御小休所趾」解説印刷物（史蹟名勝天然紀念物保存協会広島支部、昭和九年七月）。   | 昭和9                | 小泉邸内、明治天皇・昭憲皇太后、広島、明治20。   |

|    |  |      |                                   |
|----|--|------|-----------------------------------|
| 22 | ①加藤玄智宛島田藤四郎書簡（昭和七年十二月十一日）、②「篆額殿様祭之碑」書類、③「栃原神社由緒記」書類。                                   | 昭和7  | 栃原神社、松平茂昭、福井、明治8。                 |
| 23 | ①加藤玄智「太吾上人高井善證の生祠」（明治聖徳記念学会紀要）第四十七卷、昭和十二年所収）校正刷に、②加藤玄智識「太吾上人頌徳信仰史伝」（昭和二十七年七月朔撰文）草稿を貼付。 | 昭和27 | 駒越神社内、高井善證、静岡、明治22。               |
| 24 | ①皇晃之「銀道上人」（『教育と宗教』昭和十一年十月号切抜）。   | 昭和11 | 庄平神社、星庄平、新潟。                      |
| 25 | ①加藤玄智宛岡部鎗三郎書簡（昭和二十九年か）九月二日）、②「群馬県桐生市西堤町、石川忠房・佐藤順太夫・大野市之進生祠」写真（書簡同封）。                   | 昭和29 | （No.29参照）                         |
| 26 | ①加藤玄智「坂翁の伊勢大神宮参詣記に関する二三の質疑」（『大正大学学報』矢吹博士追悼号（昭和十五年三月）抜刷）。                               | 昭和15 |                                   |
| 27 | ①加藤玄智宛金山龍重書簡（昭和三十五年）五月九日）、②『河北新報』昭和三十五年四月七日（七面に「猪狩翁の百一年祭 十四日に 気仙沼湾ノリの育ての親」記事掲載）。       | 昭和35 | （No.30参照）                         |
| 28 | ①「神社新報」昭和三十四年十月三十一日（四面に加藤玄智「文明教期に於ける神道生祠の一事例」論考掲載）。                                    | 昭和34 | 五十鈴神社内、猪狩新兵衛、宮城、文政11。             |
| 29 | ①『代々木（明治神宮社報）第五号（昭和三十三年五月一日、二頁に加藤玄智「明治神宮と天皇の御生祠」論考掲載）。                                 | 昭和33 | 小西邸、明治天皇、宮城、明治9、他。（No.9、No.11も参照） |
| 30 | ①加藤玄智宛岡部鎗三郎書簡（昭和九年）十月二十日）、②『時事新報』群馬版・昭和九年十月十九日（埋れてゐた古代桐生の姿 珍しや古墳列等観る」記事切抜）、③×毛罫紙二枚。    | 昭和9  | 三莊大明神（石川様）、石川忠房他、群馬、文政3。          |
| 31 | ①『皇道日報』昭和十六年十月二十四日（三面に「明治天皇奉祀の日本最初の神社 北小沼村高山家に」記事掲載）。                                  | 昭和16 | （No.9参照）                          |

|    |  |                  |                        |
|----|--|------------------|------------------------|
| 43 | ①加藤玄智撰「松岡萬大人の生祠」(大正十五年二月十七日)、原稿用紙二枚。   | 大正15             | 池主靈社、松岡萬、静岡、明治9。       |
| 42 | ②同抜刷貼付「本多忠籌公木像」写真。<br>①加藤玄智「本多忠籌公の生祠」(『財団法人明治聖徳記念学会紀要』第四十卷抜刷)、<br>②「御聖徳偲び奉る御生祠 加藤玄智博士が参拝と講演」(記事掲載)。          | 昭和8              | 泉神社、本多忠籌、福島、文化元。       |
| 41 | ①「朝日新聞」長野版(昭和十六年十一月十一日、六面に「明治天皇の御生祠 加藤博士も調査して激賞」記事掲載)、②「信濃毎日新聞」昭和十六年十一月九日(三面に「御聖徳偲び奉る御生祠 加藤玄智博士が参拝と講演」記事掲載)。 | 昭和16<br>(No.9参照) |                        |
| 40 | ①加藤玄智「加藤玄智生祠仁礎神社」メモ書(昭和廿一丙戌五月末日)、②加藤玄智宛植木俊次書簡(昭和二十一年四月十五日)。  | 昭和21             | 中村邸内仁礎神社、加藤玄智、茨城、昭和8。  |
| 39 | ①瀧鑑類函、王十朋伝のメモ原稿用紙(加藤玄智宛岡部鎗三郎書簡(昭和十五年か)九月十九日の封筒入、表に生祠(支那人)と青鉛筆書)。   | 昭和15             |                        |
| 38 | ①加藤玄智「生祠研究に関する質問——乞御回答」(謄写版) 八枚一綴。   | 大正12             |                        |
| 37 | ①「平賀源内先生生祠保存会趣意書会則」(昭和十五年か)。   | 昭和15             | 平賀源内、広島。               |
| 36 | ①「秋田」第七卷第十号(鷲尾よし子編、月刊秋田社、昭和十四年十月一日発行、二頁三頁に加藤玄智「秋田県下の生祠の数々(一)」収録)。  | 昭和14             | 八幡神社合祀、石川理紀之助、秋田、明治43。 |
| 35 | ①「同人明るい家」昭和十四年三月号(播磨龍城「神社にまつられた恐縮談」収録)。  | 昭和14             | 克守神社、播磨龍城・小島利雄、長野、昭和8。 |
| 34 | ①「皇国時報」昭和十七年六月二十一日(2頁に猿渡盛厚「古典に於ける生社生祀に關する一考察(中)」論考掲載)。   | 昭和17             |                        |
| 33 | ①「明治天皇昭憲皇太后章津御小休所趾」解説印刷物(史蹟名勝天然紀念物保存協会広島支部、昭和九年七月)。  | 昭和9              | (No.11参照)              |
| 32 | ①加藤玄智宛新津徳如絵葉書(昭和十三年八月十五日。加藤玄智博士昭和八年十一月撰文・本別山溪「玄智殿」)。   | 昭和13             | 本別義経山神社、昭和天皇、北海道、大正12。 |

|    |   |                      |  |
|----|---|----------------------|--|
| 44 | ①加藤玄智宛中山久四郎（？）葉書（昭和十八年九月十八日）。   | 昭和18                 |  |
| 45 | ①加藤玄智宛中山久四郎（？）葉書（昭和十九年九月十三日か）。  | 昭和18                 |  |
| 46 | ①丹那神社絵葉書、スタンプ。  | 不詳                   |  |
| 47 | ①加藤玄智「明治天皇御生祠——信州北佐久郡小沼村高山家後庭内奉安」（『財団法人明治聖徳記念学会紀要』第五十八巻前刷）、②高山昌美「迎鑾亭詠集抄録ノ追録」印刷物一枚、③加藤玄智「昭和現代の生祠西霊社」（『神道学雑誌』昭和十五年六月号切抜）、④「弘道」昭和九年九月号（三〇〜三六頁に「加藤玄智」乃木大将を祀れる最初の神社）講演録掲載、加藤の加筆多数。 | 昭和9、<br>15、18、<br>不詳 | ①②高山邸（No.9参照）、③西霊社（No.15参照）、④濱島邸乃木神社（No.19参照）。 |
| 48 | ①『学友会誌』第十八号（福島県立白河高等女学校学友会発行、昭和十二年三月十一日、二九〜四六頁に深谷堅太郎「松平楽翁公と神武の道」収録）。  | 昭和12                 | （No.19参照）                                      |

\*生祠情報の傍線は『本邦生祠の研究』掲載の事例。資料情報の傍線は「加藤玄智年譜」（島菌・前川）未掲載の文献。

（平成二十年十二月、佐藤）

らの資料は、加藤が『本邦生祠の研究』公刊以降も生祠の情報収集や研究を継続していたことを明らかにしている。

### 三、本考察の成果と今後の課題

——むすびにかえて

本稿の冒頭に掲げた問題、戦後の「人心の引締」を願って生祠研究ことに「小島蕉園大人の生祠、西忠義大人の生祠」を力説した加藤の思いは、「加藤玄智博士生祠研究資料」所収のNo.29「明治神宮と天皇の御生祠」（昭和三十三年）に表れていると思われるので、やや長めに紹介しておきたい。

人間の死後を神に祀った文明教期の神社には、楠公を祭神とした湊川神社、乃木聖雄を祭神とした赤坂の乃木神社、近江聖人と呼ばれた中江藤樹先生を祭神とした琵琶湖畔の藤樹神社、二宮尊徳翁を祭神とした小田原の二宮神社等実に枚挙に遑がない。何れも皆至誠の溢れた義人正士の人格の中に人以上の神の光を拝して是を神社に祀つたものである。

是即ち忌部の正通大人が「人の心清明なれば即ち神なり」（神代口訣）と述べた通り文明教期の神道精神の現はれである。殊に乃木聖雄の場合に於ては赤坂に乃木神社が聖雄死後に創立されたばかりでなく実は名古屋

屋市から遠くない尾張の豊明村に、乃木聖雄存命中から聖雄の至誠の徳に感激して居つた濱島伊三郎と云ふ人が、聖雄の生前から其家中に神棚式に乃木聖雄を祀り毎月神官を招いて其祝詞を以て聖雄を生祀して居つた。然るに偶々同氏が名古屋停車場で明治天皇の靈柩が京都に向はれるのを奉迎して居つた当夜始めて聖雄の死を新聞号外で知り帰宅するや直ちに大工を呼んで乃木神社を其邸内社に建立したのである。故に私祭の乃木神社は乃木聖雄生祠の延長であることは明瞭である。

故に乃木聖雄は生前死後或は名古屋に或は東京にそれぞれ生祠と死祠との両神社を有することになつた。

又有名な小島蕉園と云ふ大人は江戸時代に田安德川の代官として甲州東山梨郡日川村一丁田中を治めて居つたが其崇高な至徳に感じて其至誠に動かされ一丁田中の住民は生前から既に蕉園大人を神社を造つて祭祀して居つた。是明かに生祠の一例である。

又新しい処では西忠義といふ方が北海道日高国浦河町に北海道支庁長として勤めて居つた時、蕉園大人と同様に正士義人の真面目を發揮し、凡人の到底及ばない清明正直の至人真人として其地区を治めて居つたから昭和六年忠義大人の存命中に於て神祭され其生祠が

浦河の地に出来上つた。(拙著本邦生祠の研究参照)

今かかる実例に依つて生祠の一般性質を知つて後明治神宮の場合に思を廻らすと代々木の神宮は天皇の聖徳に感激して崩御の後に日本国民の至聖所として其創立を拝したのであるが、是に先き立つて私の調査に依れば、北は宮城県、南は広島県、本州中央では長野県等に於てそれぞれ天皇と特別の御縁故の深かつた地区にあつては期せずして天皇の御存命中より早く既に御生祠を建てて天皇を神祭して居つた。<sup>(18)</sup>

右の文章は、加藤の生祠研究のエッセンスとして要を得たものであり、戦前期に確立した神道理解を着実に受け継いでいる。その特色は、天皇崇拜を絶対化する方向よりも、むしろ日本の偉人奉祀の歴史上で相対的に捉えることにあつたことが明瞭に伝わるのではないだろうか。よつて、

明治天皇のお詠みになつた御製の中から、文字の間違いなど全く心配のない迄に精製された無上至極の歌典であるのみならず、世界の宗教殊に日本の宗教、東洋の宗教、否世界の宗教界のシャンデリアの光り耀く実状とも云えよう。又日本のどの家庭にも一本を蔵して、朝夕若い子供達の教育書として拝読さすべき神典である。今日西洋に向つて現代実行のこの種の書籍を求めれば何人も先ずバイブルを挙げるだろう。今日日

本に於てこれを示すものは本書であると私は断言する。<sup>(19)</sup> という、最晩年における『新輯明治天皇御集』受贈にあつたこのコメント「『明治天皇御集』新刊さる」(昭和四十年)は、加藤の神道観を踏まえてこそ吟味し得るものであろう。

多仁照廣「勘定奉行石川忠房の生祠について」(平成九年)が指摘したように、日本における生祠の全国的な調査は加藤玄智『本邦生祠の研究』があるのみであり、加藤が晩年に願つた生祠研究の進展は、必ずしも顕著とはいえない状況である。しかしながら、小林健三氏宛の書簡(昭和三十八年五月二十四日)にしたためられた、

生祠研究……この研究は決していそぐものではなく、私が他界した後でも、神道又は神仏研究の好資料とお考えになるなら、私の死後も諸賢の研究題目中に「生祠」の一項目をお加え下され、その研究より推して神道または神仏研究に新生面を拓いて頂けば有難し。畢竟私の目標はここにあるのですから……<sup>(20)</sup>

との助言は、後学の徒が世代を超えて受け止め、探究を試みるべきものと思う。

注

(1) 新田均『近代政教関係の基礎的研究』(第九章「加藤玄

- 智の「国家的神道」論）、大明堂、平成九年、二八七～二八八頁。
- (2) 安蘇谷正彦「神道研究」の百年——神道研究の二つのタイプ（『宗教研究』三四三号、二〇〇五年）、一六〇頁。拙稿（『研究発表』近代の神道・日本研究と明治天皇論——加藤玄智を中心に）（『神道宗教』二〇六〔第六十回学術大会紀要号〕、平成十九年、一五八～一五九頁。
- (4) 島園進・前原理子・高橋原「解説」（『加藤玄智集』第九巻、クレス出版、二〇〇四年）、二九頁。
- (5) 中村生雄「加藤玄智の神道学と生祠研究——国体論とフィールド志向のあいだで」（『宗教研究』三三二五、二〇〇〇年）、一四〇頁。
- (6) 宮本誉士「研究発表」加藤玄智の生祠研究とその周辺（『神道宗教』二〇六〔第六十回学術大会紀要号〕、平成十九年、一三八～一三九頁。
- (7) 小林健三「加藤玄智博士の学績」（『神道研究紀要』一、昭和五十一年、二四頁。
- (8) 小林健三「加藤玄智博士の学績」（『神道研究紀要』一）、三五頁。
- (9) 加藤玄智「二宮一社」私観——現代神道展開の三方面（『神道学』二九、昭和三十六年）、六三頁。
- (10) 加藤玄智「私の乃木神社信仰」（『聖徳』三七、昭和三十六年）、二頁。
- (11) 加藤玄智「日本精神の理解には先づ生祠を」（『聖徳』三八、昭和三十七年）、三頁。
- (12) 加藤玄智「先づ自覚帰正の新年を」（『富士文庫報』一四八、昭和三十八年）。

- (13) 加藤玄智「生祠研究より見たる神仏二教と基督教（承前）」（『聖徳』六四、昭和三十九年初出。『神道研究紀要』八、昭和六十年）、八頁。
- (14) 「題神道」（『富士文庫報』一五七、昭和三十九年）。
- (15) 鎌田純一「加藤玄智博士の想い出」（『神道研究紀要』八、昭和六十年）、一三頁。
- (16) 宮沢末男「文学博士加藤玄智先生生祠の研究資料目次」（明治神宮所蔵『加藤玄智博士生祠研究資料』）。
- (17) 宮沢末男「文学博士加藤玄智先生生祠の研究資料目次」（明治神宮所蔵『加藤玄智博士生祠研究資料』）。
- (18) 加藤玄智「明治神宮と天皇の御生祠」（『代々木』五、昭和三十三年）、二頁。
- (19) 加藤玄智「明治天皇御集」新刊さる」（『富士文庫報』一六一、昭和四十年）。
- (20) 多仁照廣「勘定奉行石川忠房の生祠について」（『敦賀短期大学紀要』一二、平成九年）、一頁。
- (21) 小林健三「加藤玄智博士の学績」（『神道研究紀要』一）、四三頁。

【付記】 本考察にあたり、鎌田純一先生、照沼好文先生、さらに明治聖徳記念学会および明治神宮の諸先輩より多大な教示を戴きました。記して感謝申し上げます。

（御嶽山御嶽神明社禰宜）